

女性医師エッセイ

内視鏡一本かかえてパラオへ・・・?!

岩国市 脇本 真理

こんにちは。いつも「女性医師エッセイ」を楽しみに読ませていただいています。この度、まさかの投稿依頼を受けてしまった。はて？私は女性医師として皆様にお伝えするものが何かあるのだろうか？そのうち浮かぶだろうと日々過ごしているうちに、締め切り近くになってしまった。やばい、これしかないと絞り出したのが、このタイトル。ん十年前のバブリーな時代、パラオで医療を体験したことを、もう定かではない記憶をたどって書いてみようと思う。

休みなく働いた研修医を終え、医局から一般病院へ派遣された卒後三年目。友人たちとの女子会で、たまたま置いてあったダイビング雑誌に目が行き、「ここ綺麗なア。行ってみたいア。」「一緒に行こうヤ！」（私、大阪出身です）なんて盛り上がった。ダイビングの経験はなかったけど、その旅行に向けて皆でライセンス取得に励み、卒後初めての夏休みをパラオで過ごすべく、女子 4 人で出発した。

半日かけて到着したそこは・・・大阪・神戸の大都会とはうってかわった未開の地。真っ暗なでこぼこ道をゆっくり走るバンに揺られ、カエルの鳴くジャングルの先に、私たちのホテルがあった。朝、生まれてほぼ初となるダイビングスポットに、スピードボートで向かう。見渡す限りの地平線に真っ青な空、白い入道雲。マッシュルームのような小島。まるで湖のように穏やかで、青、白、緑と色を変える水面。底がないほど深く、流れも速

いダイナミックな水中。カラフルな魚の群れ・・・まるで夢の中にいるようだった。

その翌年も同じメンバーでパラオに出発した。前回は初心者だったけど、今回は近場の白浜や越前でも潜っていた。でも、でも、パラオの海は全然違う！もう帰りたくなかった。私はすっかり虜になってしまった。パラオにもダイビングにも。

あの美しいパラオで帰国日にとらわれず、思う存分ダイビングしてみたい・・・と思うようになった。もともと 1～2 年はどこかで医療ボランティアをしてみたいと思っていた。大好きなパラオでできないか？と思い立ち、まず JICA にあたってみた。「パラオとは国交がありませんので、協力隊の出向はありません。」とのこと。旅行で行けるのに、国交ないってどういうこと？当時はネットなどない時代で、まず図書館で調べることに。パラオについて書かれている本の著者に電話をしてみたり、扱ってくれた旅行社の担当者に聞いてみたりと、あらゆることをして情報を集めた。パラオは南洋諸島として日本の領土だったが、大戦後アメリカの信託統治となっていた。あのきれいな海は数十年前は日本だった。実はそんなことも知らなかった。あんなに美しい静かな海で、当時の私と変わらない年の日本兵が息をひそめて大砲を握っていたなんて・・・情報を得ていくたびにパラオがますます魅力的に思え、「絶対に行きたい！」という思いがどんどん募っていった。

本の著者から、日本ミクロネシア協会なるものを知り、そのついでパラオのクリニックで働くことが可能になった。やった！！実際は、ここからも紆余曲折あったが、ようやくテンポラリーの医師免許を発行してもらった。向こうから「そんなにパラオで働きたいの？いいよ。そのかわりに、内視鏡寄付してくれない？」・うーん・単独ボランティア、もちろん給料はタダ、渡航費、生活費すべて自腹という条件なのに、内視鏡のお土産まで？？と思ったが、そこで諦めたくない私は、内視鏡を何とか手に入れられないかと日本で奔走した。「中古の内視鏡、余っていませんか？」オリンパスや大学や出向病院やらに聞きまわった。そして、なんと、当時の教授が「これでパラオ人のピロリ菌を調べてきなさい。」と、ポケットマネーでポーンと内視鏡と光源を買ってくださった。突然一年の休暇を申し出た我儘な私に恩に着ます、教授。愛しています。後で分かったのですが、これって「とりあえずは言ってみよう、ちょうだいて。」って標語があるほど（嘘です）一般的なパラオ人のご挨拶であった・

そんなことはいざ知らず、人のいい日本人の私はお土産の内視鏡までもって、パラオに乗り込んだ。パラオのクリニックではまず日本語が話せるパラオ人（当時は 60 歳以上のパラオ人は日本語教育を受けていた。）を担当した。「内地から来られた先生ですか？」と丁寧で流暢な日本語（時に死語も）で話しかけられ、「これは何と書いてありますか？」と、日本統治時代の土地台帳なるものを持ってこられたことも・日系パラオ人の院長は真の General Practitioner で、彼のもとで仕事ができる私はラッキーだった。眼底鏡や耳鏡の見方もここで教わった。患者さんは様々な疾患で来院され、時には飼い犬や猫、小鳥まで・大きな手術と出産以外は何でも診ていた。

パラオはもともと紙幣経済ではなく、家宝としてストーンマネーがある。現在は物々交換は成り立たず、アメリカドルを使用している。そのクリニックは、たくさんの人からの寄付で成り立っており、その方は診察料が無料になっていた。パラ

オ人はどんなに大儀いでも必ずシャワーをし、一番上等の服を着てクリニックに来る。どんなに待っても文句ひとつ言わなかった。

肝心の胃カメラは、症状のある約 250 名に行った。日本からの寄付だったので消毒代程度の値段（40USD）で行っていた。それまでパラオに胃カメラはなく、島民はグアムまでいかなければいけなかったが、そこでは 200～400USD だったと聞く。医局から送られてきたピロリテックでピロリ菌感染の有無を調べ 90% 近く陽性だったが、パラオ人の胃粘膜は美しかった。萎縮性胃炎はほとんどなく、潰瘍はあったが胃がんは 2 例で、いずれも M.Lymphoma だった。そして、時にはそのカメラを大腸に使用することもあった。アメーバ腸炎は数例経験した。

小さなポータブルエコーがあり、あまりよく見えないのだが腹部以外に心臓や婦人科臓器、甲状腺もそれを使って担当していた。薬はアメリカから購入していた。当時すでに合剤はたくさんあり、こりゃ便利じゃ！と思っていた。

日本語と片言の英語と覚えたてのパラオ語を交えて会話し、親日的で優しいパラオ人スタッフ、患者さんと本当に楽しく過ごした。もっとコミュニケーションが取れたら、得るものも数倍あったかもしれない。パラオは一年のつもりで出かけたが、少ないながらもお給料をいただきながら、結局 2 年半お世話になった。友人たちが Titel を目指している時期のお粗末な体験だったかもしれないが、私にとっては、この貴重なかけがえのない経験で人として、医師として、大きく成長できたと信じている。